

ルーミーの共生思想—聖人伝、マスナヴィーなどから

佐野 東生

2021年1月23日（土）

東京ジャーミイ トルコ文化センター

1. 本日の講演：ルーミーの共生思想とは—イスラームとキリスト教などの交流を中心に

- ルーミーの紹介
- 2019年12月のトルコ・コンヤ調査の報告
- ルーミー聖人伝と代表作マスナヴィーにみる思想と交流
- 現代に生きるルーミー思想の特色

2. イスラーム神秘思想と諸宗教の交流・対話

スーフィズム（タサウフ）：イスラーム神秘主義・思想のこと。イスラームに立脚しつつ、ズィクル、セマーなどの行法による修行を通じ、神との合一を目指す禁欲主義的流れ

タリーカ：スーフィズムを基に大衆の民俗信仰を吸収して成立したイスラーム神秘主義教団。スーフィー聖者の聖廟や道場を中心に大衆が集まり、修行や祭りなどを行う。

諸宗教の対話：世界の宗教信仰の多様性の奥に「聖なるもの」とそれを拝み、目指す人間。この共通性を基に交流と対話へ ■神秘思想はその基となる可能性

3. 神秘思想のエッセンス：神へのあこがれと回帰 マスナヴィー巻頭詩：葦笛の詩より

聞きなさい、葦笛の音色がいかにかに語るかを 別れを嘆くのを

葦笛曰く、葦原から刈り取られてから 我が嘆きに男も女も涙する

私は胸が引き裂かれんことを望む、別れから 渴望の痛みがいかほどか語るため

誰も自分の根源から引き離された人は また探し求める、それと一つだった日々を

4. ルーミー(Muhammad Jalal al-Din Rumi) (1207-73) の生涯：ヒダーイェトオウル博士 (Dr. Hidayetoglu) (ルーミーの第21代め子孫) のルーミー伝より

1) 生年・生地：1207年バルフ（現アフガニスタン）生まれ（最近の説ではヴァフシュ（タジキス

タン) 生まれ)。母 Mu'mina Khatun はバルフ知事の娘。父 Baha' al-Din Walad は Sultan al-'Ulama (学者の王) と呼ばれ、母方でフセイン (預言者ムハンマドの孫で第4代カリフ・アリーの子) から14代め、父方でアブー・バクル (初代カリフ) から10代めといわれる。

2) コンヤ (現トルコ) へ移住：父は哲学を批判したため讒言に会い、1212-13年、フワーリズムシャー朝 (1077-1231) から家族でメッカ巡礼へ。コンヤに定住 (1228)。途上、ニシャプールでアッターール (ペルシア神秘主義詩人)、ダマスカスでイブン・アラビー (イスラーム神秘哲学者) に会い、ルーミーの将来を予言したとの伝承。

ルーミー：ルーム (アナトリア) は最善の地で、神が「霊液」をその人々に振りかけてアーリフ ('arif) (霊智ある人) に近くなるよう変貌させるため我らを使わした。詩「貴方 (神) は我がホラーサーンからギリシア人らの元に私を使わしたり 私が彼らと混ざり、よき宗教に導かんがため」ルーミーは18歳で結婚

5. シュムセ・タブリーズィーとの出会い、「愛される人」へ神と相思相愛の関係

愛する人と愛される人の鏡の関係 M (マスナヴィー) 1巻/1739-41節

無我夢中の人々に、心奪う人は心奪われる 愛される人すべては、愛する人々の獲物

あなたが愛する人と見る人すべて、愛される人と知れ

相対的なれば、これでもあり、あれでもあり

喉渇く人々が水をこの世に求めれば 水もまたこの世に喉渇く人々を求めよう

6. セマーの始まり：ルーミーが金細工を打つ音で踊り出す

宝石商シェイフ・サラーフ・アッディーンの前で A (アフラーキー著ルーミー伝) 2巻:5章/7

ある日徒弟に金細工の葉を打たせていたときに、ルーミーが通りかかりその打つ音に応じて旋舞をはじめ。シェイフは店から出て跪き、ルーミーの祝福を受け、たとえ金細工が壊れても打ち続けよと命ずる。長い旋舞のあと、金細工の葉は壊れておらず、店は金細工に満ち、これを見たシェイフは店をたたみ、ルーミーに従う。

7. 代表作・精神的マスナヴィーの作成

後継者チャラビー・フサーム・アッディーンの貢献 (M.4/1-6)

おお、ズィヤー・アルハック (真実の輝き) フサーム・アッディーンよ

そなたの光でマスナヴィーは月を越えた

そなたの高き望みが、おお望み抱かせる人よ これを引いていく、神のみぞ知る所へ

このマスナヴィーの首をそなたは縛り そなたの知る所へそれを引いていく

マスナヴィーは探求し、それを引く人には見えず 眼力ない無知の人には見えず

マスナヴィーは、そなたが源だったゆえ もし増えればそなたが増やしたもの

そなたがかく望むゆえ、神はかく望む 神は敬虔な人々の望みをかなえ給う

8. ルーミーの死去 (1273年) : キリスト教徒、ユダヤ教徒らの参列

参列したキリスト教徒らの弁明 (A2: 3/580)

我々はモーゼの真理、イエスの真理、そして預言者すべての真理を、この方の明解な説明で理解するようになりました。我々はこの方に我らの聖典に読む完全な預言者の行動を見出します。もしあなた方ムスリムがモウラーナー Mowlānā (メヴラーナ : 我らの主) (ルーミーの尊号) を当世のムハンマドと呼ぶなら、我々はこの方を当世のモーゼ、イエスと認めます。あなた方がこの方を尊崇し、献身する如く、我々はその千倍もこの方の弟子なのです。

9. ルーミー伝にみるキリスト教徒との関係 1 (A1 : 3/536)

ルーミーがプラトン修道院 (コンヤ郊外) に来て 40 日間独居隠遁し、終わって出てきた際に修道士が、クルアーンでは「よいか、お前たち一人残らず一度はあそこ (地獄のふち) まで降りて行かねばならないのだぞ。」(第 19 章「マルヤム」第 71 節) とあり、全員地獄の業火に焼かれるのに、どうしてイスラームが我らの宗教 (キリスト教) より好ましいのですか、と問うた。ルーミーは無言で修道士をコンヤのパン屋に連れて行き、その衣を自分の衣で包んでかまどに入れた。暫くして出すと、ルーミーの衣は無傷で、修道士のものは焼け焦げており、ルーミーはこれが我らとあなた方の火への入り方だ、と述べ、修道士は (キリスト教徒のまま) 弟子になったという。

評価 : ルーミーが恐らく修道院を訪れ、修道士らにも通ずる禁欲的行を行ったか、少なくとも交

流、感化を与えた証拠。この修道院は後にメヴレヴィー教団と関係を続け、オスマン帝国の保護も受けている。

10. ルーミー伝にみるキリスト教徒との関係 2 (A3/184)

ルーミーがテルヤヌス (Theryanus) との名のキリスト教徒ギリシア人の若者が殺人の罪でキサース (qišāš) (イスラーム法の同害同復刑) されかかっているのを助け、スルタンもこれを認め、ルーミーに感化された若者はムスリムとなった。テルヤヌスはすぐに学問と神秘主義の境地で優れたムスリムとなったが、コンヤのカーディー (qāḍī) (イスラーム司法官) に同人がルーミーを神と呼んでいる、と問われると、「そうではなく「神を創る人」(khodā-sāz) と呼んでいます、なぜなら私のような異教徒を「神を知る人」(khodā-dān) になさったからです」と答えた。

評価：神秘主義の神智と神人合一の境地にルーミーが到達しており、同人も同じ境地に導かれた。

A 1 : 3/186

テルヤヌスがスーフイーの一团に、なぜルーミーを神と呼ぶのか問い詰められ、「なぜなら私は神以上の名で言うものを知らないからです、もし他の名があればそれを言っていました」と答えたという。

11. ルーミー伝にみるキリスト教徒との関係 3 (A 1 : 3/371)

ルーミーの貴顕の信者の一人に、キリスト教徒グルジア人王女でスルタンと結婚した女性がいた (後にパルヴァーネと再婚)。彼女は熱烈な信者で、カイセリに行くことになった際、ルーミーの似顔絵を聖人のイコン画のように携えていくため、評判のギリシア人キリスト教徒の画家に描かせる。画家はルーミーの姿を描こうとし、20 枚にわたって描くがその度に別人の姿となってしまう。ルーミーは自分を「境目なき海」と謳い、画家は仕方なくその絵を彼女に持って行き、旅先で常に携え見ていたという。

この逸話は、イエスに関する伝承で、エデッサの王が王の病を治すためキリストの絵を求め、画家を派遣するが、画家はキリストの顔が描けず、キリストが顔をふいた布に顔が写って、王の病が治ったとの逸話に類似するとされる。

12. ルーミー伝にみるキリスト教徒との関係4 (A1:3/537)

同じ画家がコンスタンティノープルにあって生きているようで決してまねできないというマリアとイエスの木版のイコン画を盗み、ルーミーの元に持参すると、ルーミーは絵姿を見て、不平を述べていると伝える。画家が絵が話すわけがないというと、神の描かれた図像である貴方がなぜ無意味な絵を尊ぶのか、と問い、画家は改心しムスリムになったという。

評価：ルーミーは偶像崇拜禁止の見地からイコン画への崇敬を一応否定しているが、それでも当時の多文化共存の環境下で、絵画に宗教的意味を付与して信じる大衆的信仰・文化がムスリムも含め共通に存在したことを示唆する例

イコン画について、シリアの Saidnaya の奇跡をもたらすイコンはキリスト教徒、ムスリム双方の巡礼が崇拝していた。ルーム・セルジューク朝スルタン（おそらくルーミー一家をコンヤに招聘したケイクバード1世）の逸話として、アンタルヤのキリスト教会に、コンスタンティノープルの Blachernitissa（7世紀のマリアのイコンのある教会）同様の奇跡を見るため訪問したとされる。その他、カイカーウス2世（在位1245-1260）はコンスタンティノープル滞在時（1260年代）にイコンを崇敬していたという。

13. 「愛の信仰」とモーセ：精神的マスナヴィーより (M1:2447-2481)

(羊飼いが神に対しその靴を縫い、髪を梳き、服を洗いますなどと勝手な祈りを捧げているのを聞いて、モーセが神を汚すものと叱ったのに対し)

羊飼いは言った、おおモーセよ、あなたは私の口を縫った

そして後悔によってあなたは我が魂 (jān) を焼いた

衣を引き裂いてため息をつき、急いで 頭を砂漠に向け、去った

啓示がモーセに下された、神から あなたは我々 (神) の下僕を我々から引き離した

あなたは結合させるために来たのか いや、分け隔てるために来たのか

できる限り、足を分離の中に置かないようにせよ 私にとって最も厭わしいのは離縁だ

誰にでも、私はその人独自のやり方を授けた 誰にでも、独自の言い方を与えた

彼にとっては称賛に値するが、あなたにとっては非難

彼にとってははちみつだが、あなたにとっては毒

我々は浄、不浄すべてから免れ（我々を崇拜するのに）遅鈍、機敏いずれであっても

私は（崇拜を）命じなかった、利益を得るために

むしろ（命じた）、下僕たちに益するために

インドの人々にとってインドとの用語は称賛 シンドの人々にはシンドの語は称賛

私は清められない、彼らの（祈りの）数珠によって 彼らこそ清められ、光り輝く

我々は言葉や話を見ない 我々はその精神(ravān)を見る、その状態を

我々は心(qalb)を観る、もし謙虚だとしたら たとえ語の言い方が謙虚でなくとも

心(del)は本質であり、言葉は偶有であるため そこで寄生する、偶有は、本質が目的

.....

愛の信仰 (mellat-e 'eshq) はあらゆる宗教とは別だ

愛する人々にとって信仰と宗派 (madhhab) は神 (khodā) だ

ルビーにたとえ印がなくとも恐れるに足らず 愛は悲しみの海でも悲しみに暮れない

その後、モーセの（心奥の）秘密に神は隠し給うた 言葉で言い表せない秘密の数々を

モーセの心 (del) に話が流れ込んだ 見ること、言うことが一緒に混ざった

何度も無我の境地となり、何度も我に返った 何度も飛翔した、永劫から永遠へ

14. モーセとファラオ：預言者と悪人の救い M1:2447-2481

モーセとファラオは真理の下僕 表ではあれ（モーセ）に正道あり、これ（ファラオ）になし

モーセは日中神の前で呻き ファラオは夜半に嘆いた

この鉄の首枷はなにか、おお神よ、我が首にある 首枷なくば誰が私は私と言えよう

それによりモーセを輝かし 私を濁らせた

それによりモーセをあなたは輝く美貌にし 我が魂の相貌を暗く陰らせた

....

秘かに私は謙虚で中庸を得つつある　私がモーセに至ったとき、どうなるうか
偽の金色が内部 10 層に塗られても　火を前にしては真っ黒な顔のようになろう

我が心、姿はかのお方の命にあるのではないか　一瞬に私を核とし、また一瞬に殻とする

．．．

無色が色に捕われたため　あるモーセが別のモーセと争うようになった
あなたが元々持っていた無色に至ったとき　モーセとファラオは和解しよう
これぞ驚くべきこと、この色が無色から出でたのは　色は無色とどうして戦おうか
油は水から創られるのだから　水は油となぜ対立するのか
バラはとげから生まれ、とげはバラから、なぜ　2 つとも争うのか、騒擾にあるのか
あるいは戦いではないのか、これは、智慧のためなのか

まるでロバ売りたちの口論のように仕組まれたものか

あるいはこれでもなくあれでもなく、当惑なのか
宝庫を探さねばならない、これ（当惑）は（宝庫のある）廃墟だ
あなたがその宝庫と夢想するのは　その夢想によりあなたは宝庫を失う
開かれた地のようと知れ、夢想や見解は　宝庫はあるまい、開かれた地には
開かれた地には存在(hasti)と争いがあった　無(nīsti)にとって諸存在は恥だった
存在が無に対し助けを求め叫ぶのではなく　無がかの存在を拒絶する
あなたは私が無から逃げていると言うべからず

むしろ無があなたから逃げている、言うべからず

表では無はあなたを自分の方に呼ぶが　本当はあなたを拒絶のこん棒で追い払う
逆さまの馬蹄で行方をくらすのと同じだ、おお健全な者よ

ファラオの憎しみは「神との対話者」(kalim) (モーセ) (の憎しみ)に発すると知れ

15. マスナヴィーとキリスト教：M1.324-739

イエスの時代なりき、かのお方の番なり　モーゼの魂はかのお方、モーゼはかのお方の魂

斜視の王は神の道でみなせり

かのお二人の神の友を別々に

(以下要約) イエスの時代、あるユダヤの王がいて、キリスト教徒を迫害し殺害。その「斜視」の王はモーセとイエスを分けてしまっていた。一逸話：主人が斜視の者にビンを持ってくるように命じ、斜視の者は二つのビンのどちらを持ってくるか問うと、主人はピンは一つで、斜視ゆえ二つに見える、一つを壊せ、と指示。壊すとピンは二つとも消える。怒りと欲望で人は斜視となり、私欲で美德は隠され、心と目の間に百のベールがかかってしまう。一王はユダヤ的憎悪で斜視となり、信者数十万人を殺し、モーセの宗教の守護者と称していた。

(要約) 王に悪い宰相がおり、王に対しキリスト教徒が表面のみ改宗し、裏では元のままとし、キリスト教徒を殺すより、キリスト教徒を表裏ともに根絶するよい方法があると告げる。それは宰相の耳・手を断ち、鼻、唇を削いで絞首台に引き出し、仲裁者があらわれたら遠方に追放するように、そこで彼らに悪をなすと。自分は彼らに言おう、自分は秘密裏にキリスト教徒で、王は見破り、殺そうとした。自分は彼の宗教を装ったが、王は嗅ぎつけ、真相を見破った。

王は彼（宰相）の言うままに処分したり 人々ただ驚くばかり、その密かな陰謀から

王は彼をキリスト教徒の方に追放せり 彼は偽の教えへの誘いを始めり、その後

数多のキリスト教徒が彼の元へ 次第次第に集まれり、彼の方へ

彼は宣べたり、彼らに、こっそりと 福音、腰帯、祈りの秘密を

彼は表ではみ教えの宣教者たり だが裏では鳥撃ちの罠たり

(要約) キリスト教徒は見る目のある人々は大臣の甘言の背後の毒に気づいたが、一般信徒は信じ、6年にわたり大臣は彼らの中に隠れ、人々は宗教と心を彼に捧げ、彼の命で死ぬまでになった。王は大臣と密かにやり取りし、大臣はイエスの宗教にまもなく争いを起こすことを約す。イエスの民に12名の指導者あり、すべての集団が欲望から指導者の一人に従っていた。彼らと指導者は大臣の僕となり、その言行に盲従した。大臣は聖書を誤解させる書物を作る。

大臣は巻物を各々の（指導者の）名で作れり 各々の巻物の書き様は違う方針で

各々の教えは違う種類で これはあれと異なり、最後から最初まで

その一つで、禁欲、空腹を 懺悔の柱、改悛の条件となし
一つでは述べ、禁欲は無益なり この道には救いなし、物惜しみなき jūd を除いてと
一つでは述べ、汝の空腹、物惜しみなきは 偶像崇拜ならん、汝による、汝に従われる方
(神) と並ぶと

神に委ね、完全に服従する以外 悲しみ、喜びにおいて、全てはごまかし、畏と
一つでは述べ、義務は献身なり さもなくば委ねる考えは侮辱なりと
一つでは述べ、善をなし、悪を止めることを そはなすためならず、我らが無力さ示すため
己が無力さ見れば、その中に 神の力を知る、そのときに

一つでは述べ、己が無力さを見るな 神の恩寵を無視することなり、かの無力は、さて
己が力を見よ、この力はかのお方によれり 汝が力のかのお方の恩寵と知れ、そは神なり

一つでは述べ、この2つを捨てよ 偶像なり、すべて目に入るものは

彼はイエスの一色の香りを持たず イエスの色の樽に染められた性質もなし

百色の服がその単色の樽により 単純で一色になれり、光のように

(フォルーザンファル解説) 次の逸話が元：マリアはイエスを染め物職人の元に預けた。職人はイエスに多くの服を預け、一着ずつに望む色を見せ、その色に染めるように言いつけて旅に出た。イエスは服をドームの下の単色の上に置き、「神の許しで私が望む色になれ」と唱えた。職人が帰ってみると、服はドームの下で単色に染められ、服を汚したと怒った。イエスは、服をあなたが望む色のようにドームから出しましょう、と出して出すと、一着は緑になり、一着は黄色、一着は彼が望んだように赤となった。職人は驚き、神の創造に他ならないと知った。ルーミーの意図は、イエスが人々を団結、愛に呼び、彼の宗教、教えの真実を見いだした人が色、相違、2つに見ること、偽りから解放され、無色のひとつの世界に加わること。そしてすべての宗教、宗派とひとつになること。だが大臣は彼の宗教を知るふりをしながらこの点に無知で、逆の傾向にあり、相違をもたらした。

この世は汝の魂の監獄なり さあ行け、あちらへ、汝が広野へ

この世は限られ、あちらは限りなし 姿形はその前で意味するは障害なり
 百千のファラオの槍を 壊したり、モーゼの杖一本で
 百千のガレノスの医師あるも イエスとその息吹を前にため息ばかりなりき
 百千の詩集あるも ウンミー (Ummi) (文盲のムハンマド)の言葉を前に恥となれり
 かかる神の勝利あるに、誰か 死なない者あらん、卑しき者なかりせば
 多くの山の如き心を揺さぶれり、かのお方 小賢しい鳥をその足でつり下げられり、かのお方
 理解、思考を研ぎ澄ますは正道にあらず 敗滅の他、王の恩寵は受けられず

(フォルーザンファル解説) 小賢い鳥はオウムと漁師の話からとる、2つの木の間に葦の糸がかけられ、落ちないように足でつかんでぶら下がったオウムを漁師がとる。賢さは欲を伴い、天の裁定の前に無益であることを示すため。ルーミーはこの前の詩句で神の物質に対する勝利を示し、ここで魂、心に対する支配を示す。神は欲によって強く岩のようになった心をひっくり返し、人がどんなに賢くても欲にとらわれ、間違った考えを抱く限り転倒させ、誤った教示に捕われるようにする。このように神は心、賢さも支配される (Q7:24) スーフィーはこの世の賢さを好まず、賢さはあの世、内面の浄化について。創造と唯一性の原理を知るための知性、議論より内面の浄化が大事で、哲学者は死ぬまで迷った

(要約) 大臣は次の陰謀として、宣教を止めて独り隠棲し、人々に彼を熱望させることをたくらむ。40-50日隠居し、人々は彼を求め、指導者らが仲介、だが大臣は次のように断る。言葉、感覚の虜である限り真理に至れない。感覚の耳をふさぎ、心の耳で真理を聞くこと。

外界の旅なり、我らが言葉、行いは 内面の旅あり、天界の上への
 感覚は乾いた地を見き、乾きから生まれしゆえ 魂のイエスは足を海の如き心に置けり
 乾ける体の旅、乾きに陥れり 魂の旅、足を海の如き心に置けり
 人生は乾ける道のうちに過ぎゆけり ときに山、ときに砂漠、ときに荒野
 命の泉をそなたいずこに見いださん 海の波をいずこに引き分けん
 大地の波は我らが妄想、理解、思考なり 水の波は消滅、陶醉、滅却 (ファナー) なり

かかる陶酔のうちにそなたある限り、かの陶酔から遠し　ここに酔う限り、かの酒杯に盲目なり
外向きに話すはほこりの如し　しばし黙すを習いとせよ、気をつけて

(フォルーザンファル解説) 言行は心が下降した二次的なもの、心が動かす元で体を支配。心は孤立した高い境地から体に属す低い境地に下降する。心の旅は知性と孤有の諸世界、天界に比喻している。感覚は体から生まれたため外面、乾いた地に向き、魂は孤有の世界に発するためそれに向かう。イエスは一体性、孤有性の例で、「神の魂」ruh allah と呼ばれるため、魂をイエスに比喻し、「魂のイエス」と表現している。

かの大臣、孤居の内から声をあげたり　おお、弟子たちよ、我からこれを知れ
我にイエスかく伝えたり　同胞、縁者すべてから離れよと
面を壁に向けて座るべし　己が存在からも隠棲せよ
今後話しのお命じなし　今後我、話すことと無縁なり
お別れなり、友らよ、我死したり　衣類をすでに第四天に運びたり
業火のただ中に薪の如く　焼かれぬように、困苦と破滅のうちに
イエスの横に座らん、今後は　第四天の頂きにて
かくてかの指導者らを呼び　ひとりずつ別に話をせり

曰く、ひとりずつに、イエスの宗教で　神の代理、我が後継者（ハリーフエ）はそなたなり
他の指導者らはそなたに従わん　イエスは全員そなたがものにせり
刃向かう指導者はみな首を刎ねよ　あるいは処刑し、あるいは家に禁固せよ

なれど我存命のうちはこれを公けに言うべからず　我死なぬうちはこの指導権求めるべからず
(要約) 大臣は同じことを別々の指導者に言って、それぞれ別の巻物をイエスの教えとして与え、信者に読めと指示したが、内容は相互に別で矛盾していた。その後、大臣は隠棲の部屋で自殺、アラブ、トルコ、ルーム、クルド人の数知れぬ人々が悲しみ、墓所で嘆く。指導者らは一人ずつ、巻物を出して彼の後継者、イエスの当代の後継者を主張し、互に争い、多くの人々が殺される。

福音書にムスタファーの名あり　かの預言者の方々の長、清らかな大海

記されたり、その特徴、姿が 記されたり、その戦い、断食、食事の様が

キリスト教徒の一人は恩寵により 聖書でかの御名と逸話に至ったとき

その尊き御名に接吻し その優美な項に顔をつけたり

(要約) キリスト教徒の一人が福音書にムハンマドの名を見て崇敬する人々はこの争いを逃れ、指導者、大臣の悪を逃れ、アフマドの名のお陰で守られた。その子孫は増え、アフマドの光が援助した。他のグループはアフマドの名を軽蔑したため、大臣の起こした争いにより恥辱にまみれ、その宗教、法令も、ゆがんだ教えの巻物に従っておかしくなってしまった。

(フォルーザンファル解説) ルーミーは、Q7:157「すなわち、文盲の預言者に従う者たちには。この者のことは、みなが持っている律法や福音書にも書いてあるから見ればすぐわかる。」また、Q61:6「私（イエス）は私の後に一人の使徒が現れるという嬉しい音信を伝えに来たもの。その（使徒）の名はアフマド」の注釈が伝える逸話に基づく。

16. チェレビーのお話

メヴラーナの後にスルタン・ヴェレド、フサームッディーン・チェレビーにより教団化。800年にわたりチェレビー家が継承。セマーは修行として行う。金銭による腐敗もある。実際はデデが指導し、謙虚さが肝要。ルーミーは800年前、人間性を重視し、欲を減らし、愛を旨とする教えを説く。信者も信じない人も同じで、雨は石に降ってもなにも生まれないが、人に降ればなにかが生まれる。メヴラーナはスンナ派の教学を修め、教団はスンナ派。ズィクルは神の99の名を包含する「アッラー」のみ唱える。セマーは1-2-3-4の順に次第に早く回転し、神と合体する。チェレビー自身もセマーゼンで、実はあまりうまくない。

チェレビー姉（エスィン・チェレビー・バイルー）のお話：メヴラーナの教えの普遍性。イラン人はペルシア語なのでメヴラーナはイラン系だと主張するが、当時の公用語としてペルシア語を使っただけで、イラン系というわけではない。カナダで講演したが、カナダ人で毎晩マスナヴィーの一節を寝る前に唱える人がおり、その人にとってはメヴラーナはカナダの人。

17. 現代に生きるルーミー思想の特色

ルーミーのイスラーム：アッラー=愛の神=絶対的無への崇敬。神秘的修行を通じて一体となり、愛し、愛される人に■「愛の信仰」

預言者=聖人：モーセ（神と話す人）、イエス（神の魂）は預言者であると同時に神に近い聖人として崇敬■クルアーンに基づく神秘思想

ユダヤ・キリスト教観：本来のユダヤ・キリスト教は唯一神信仰としてイスラームと同じ神の教え。この立場でコンヤのキリスト教徒に接する。ただし、教えから逸脱したユダヤ・キリスト教徒は分裂■クルアーンに基づく

宗教共生思想：現代の比較宗教研究の多元主義（諸宗教の多様性の奥に同じ根源的聖性あり）に近い立場として評価。イスラーム、キリスト教、あるいは仏教の表面的相違の奥に同じ愛ある「聖なるもの」を見出す■宗教間交流・対話の手がかりになる可能性

18. 参考文献

井筒俊彦『井筒俊彦著作集 11 ルーミー語録』中央公論社 1993

佐野東生「ルーミーとキリスト教—そのイエス、キリスト教徒観より—（1）」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第22号2020, pp.9-27

<https://scri.rec.ryukoku.ac.jp/publications/data/kiyo22.pdf>

東京・トルコ・ディヤナト・ジャーミイ監訳・西田今日子訳『神秘と詩の思想家メヴラーナ トルコ・イスラームの心と愛』（written by Yeniterzi, E.）丸善プラネット 2006

Aflākī, Shams al-Dīn Aḥmad, Manāqeb al-‘Ārefīn, edited by Yazıcı, Tahsin, Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2 volumes, Ankara, volume 1; 1976 (2nd print), volume 2; 1980 (2nd print)

—, The Feats of the Knowers of God (Manāqeb al-‘ārefīn), translated by O’kane, John, Brill, Leiden, 2002

Āzarīzādī, Mehdī (edited), Masnavī-ye Ma‘navī, Enteshārāt-e Pazhūhesh, Tehrān, 2005 (8th imp.)

Forouzānfar, Badī‘ al-Zamān, Ahādīs va Qesas-e Masnavī, edited by Dāvdi, Hosein, Enteshārāt-e Amīr-e Kabīr, Tehrān, 2001 (7th imp.)

Gölpınarlı, Abdülbâki (translated and annotated), *Mesnevî: Tercemesi ve Şerhi*, I-VI cilt, II. basım, İnkilâp ve Aka Kitabevleri, İstanbul, 1981-1984

Nicholson, Reynord A. (translated), *The Mathnawî of Jalâlu'dîn Rûmî*, 6 vols., Cambridge, 1925-1940.